

《フランス映画の現在をめぐって》

Nouveaux rendez-vous
du cinéma français

Vol.02

会場 Lieux

出町座 | 3.6 [金] → 3.12 [木]、4.10 [金] → 4.15 [水]

du 6 au 12 mars & du 10 au 15 avril | à Demachiza

シネ・ヌーヴォ | 3.7 [土] → 3/13 [金]

du 7 au 13 mars | à Ciné Nouveau

同志社大学寒梅館クローバーホール | 4.14 [火]

le 14 avril | à l'Université Doshisha Kambaikan Clover Hall



Tu mérites un amour de Hafsa Herzi

企画協力・ゲスト Programme conçu avec

オリヴィエ・ペール (アルテ・フランス・シネマ ディレクター)

Programme conçu avec Olivier Père, Directeur d'Arte France Cinéma

ゲスト Invités

セルジュ・ボゾン (映画監督) Serge Bozon

北小路隆志 (映画批評家) Takashi Kitakoji

廣瀬純 (映画批評家) Jun Hirose



vivre les cultures

「映画批評月間」第2回目となる今回は、フランスだけではなく、世界の重要な映画作家たちの製作を積極的に支援しているアルテ・フランス・シネマ ディレクターのオリヴィエ・ペールにセレクションを依頼。それらの作品の上映とともに、日本の映画批評家たち、監督たちと同氏のディスカッションも予定しています。その中の一本『マダム・ハイド』の監督セルジュ・ボゾンを迎え、ミュージカルコメディから、歴史劇、学園ものから犯罪映画まで、その多彩なフィルモグラフィを一挙ご紹介しします。

ボゾン監督ほか多くの映画人に敬愛を受け、2019年8月に惜しくも他界したジャン＝ピエール・モッキーを併せて特集します。フランス映画の「最後の切り札」とも言えるモッキーの世界をぜひこの機会に発見してください。

Table with columns: Date, Time, Title, Director, and Description. Includes entries for 'L'Adieu à la nuit', 'Le Daim', 'Synonymes', 'Liberté', 'Les Hirondelles de Kaboul', 'Alice et le Maire', 'Les Dragueurs', 'Madame Hyde', and 'Madame Hyde'.

会場

◇ 出町座 京都市上京区三芳町133 (出町旗形商店街内) 075-203-9862 | https://demachiza.com/

◇ シネ・ヌーヴォ 大阪市西区九条1丁目20-24 06-6582-1416 | www.cinenouveau.com/

◇ 同志社大学寒梅館クローバーホール 京都市上京区御所八幡町103 075-251-3217 (学生支援課ホール担当) | http://d-live.info/

お問い合わせ

◇ アンスティチュ・フランセ関西-大阪 大阪市北区天神橋2-2-11 阪急産業南森町ビル9階 06-6358-7391 | Mail: kansai.osaka@institutfrancais.jp

◇ アンスティチュ・フランセ関西-京都 京都市左京区吉田泉殿町8 075-761-2105 | Mail: kansai@institutfrancais.jp



愛する作品と共に旅を続けること

オリヴィエ・ペール

Compagnon de route et de voyage des films aimés

Olivier Père

映画作家を発見し、その作家が一本、また一本と撮り続けていくために支援する、そしてまた他の作家たちへの賞賛を示し、彼らが作品を生み出して手助けをする。2012年以来、アルテ・フランス・シネマのディレクターに就任したことで、それまでの12年間、カンヌ国際映画祭監督週間、そしてロカルノ国際映画祭でディレクターとして実行してきたそうした活動を、今日まで続けてきました。現在、世界における主要な映画作家たちの作品の共同製作に参加するだけでは十分でなく、そうした作品が観客たちと出会うその重要な瞬間に寄り添い、映画作家たちとは実り豊かな対話を作り出していくことが重要です。アンスティチュ・フランセ 日本の提案により、今回初めて日本の映画ファンたちに向けて、アルテが支援している映画作品のセレクションを紹介する機会を得ました。本プログラムでご紹介するのはとくに私たちが大切に思っている作品たちであり、自由に野心的な映画を支援してきたアルテの精神を体現している作品ばかりです。カンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭の様々な部門に出品されるヨーロッパ、そして世界中の映画作品の中で、アルテ・フランス・シネマは現代映画作家たちの映画への関わりを強く示してきました。ドキュメンタリーからアニメーション、映画の様々なジャンルの再読解を試みる作品から社会への視線を基軸にした作品、現代に根を下ろしたフィクションから、より奔放なる想像力の探求まで、あるいはそのすべてを包括した作品。そうしたインスピレーションに溢れた映画作家たちに耳を傾け、斬新な作品に寄り添い続けたいという私たちの意思は尽きることがありません。映画の創造に乗り出す新顔の監督たちをとくに支援し、一作目、二作目に重要な場所を与えてきました。こうした若い世代の映画作家たちの勢いはまた女性監督たちにもあてはまるでしょう。新人の女性監督たちの中で、とくにマッティ・ディオップ (『アトランティクス』)、カンヌ国際映画祭グランプリ受賞 / Netflix で放映中)、アフシア・エルジ (『君は愛にふざわしい』)、ザブー・ブライトマン & エレア・ゴベ・メヴェレック (『カプールのツバメ』) が2019年に素晴らしい作品を発表し、観客にも批評家たちにも温かく迎えられました。多くの女性監督、しかもそのほとんどが新人監督による作品を支援できたこと大変喜ばしく思っています。世界は変化し、そこに向けられる視線も変化している、映画による刺激的冒険はそのことを私たちに伝えてくれます。そうした「新たな視線」こそ歓迎し、応援すべきでしょう。

それに特有な演劇性やロマネスク的な嗜好を損なうことなく、ドキュメンタリー的な側面も持ち合わせています。

それでは今回の目玉であるふたりの『風変わりな』^{エキセントリック}映画作家を紹介しましょう。あるときゴダールはフランス映画システムの中心を外れた自分の状況に触れ「余白こそが紙面を成り立たせているのだ」と主張しました。フランス映画には、抜け道を使うだけでなく、ときには大衆映画のコードと戯れ、狂気じみたスター俳優を共犯者として、フィルムグラフィアーを築き上げた一匹狼的作家がほかにいます。ジャン＝ピエール・モッキーとセルジュ・ボゾンは、二つの異なる時代において、まさにそうした作家を体現しています。

今回、白紙委任状を受け、2019年8月8日に他界したジャン＝ピエール・モッキーの追悼特集ぜひ提案したいと思います。若い時分に俳優としてキャリアをスタートしたモッキーは、1959年に長編処女作となる『今晚おひま?』を監督して以来、フランス映画の中でもっとも私たちが熱狂させる映画作家となりました。ヌーヴェルヴァーグの同時代人でありながら、モッキーは30年代の詩的リアリズムの伝統を引き継いでいます。モッキーの映画には、ユーモアとファンタジーがあるとともにメランコリー、暴力、そして悲劇も存在しています。そのフィルモグラフィの黄金時代には、B級犯罪映画的であると共に、フランス映画の中でも優れた政治的映画を生み出しています。その一本が1970年に撮られた『ソロ』です。

非常に独創的な作品を作り続けている1972年生まれのセルジュ・ボゾンは、今日、モッキーの後継者として存在でしょう。ひそかに展開される不条理とも言えるユーモア、陰謀や謎への嗜好、無味乾燥にも思える作風、速度ある語り、そしてとりわけ「アート系」映画としてごたごたと煽る拒否、セルジュ・ボゾンの映画の魅力は、(映画史と)断絶しながらもその伝統を受け継ぎ、新たなものを創造しながら、過去の作品の引用もするという、相反する運動の間を自由に往来していることでしょう。

批評家でもあった映画作家セルジュ・ボゾンは、フランス映画史への反旗の記憶を携えながら、無難な道を迎えることをせず進んできました。「フランス」、それはボゾンの映画の重要なテーマです。その歴史(まさにそれがタイトルにまでなっている『フランス』)、フランス共和国の制度や組織 (『ティップ・トップ』の警察や『マダム・ハイド』の学校)、それらが頑強なまでに反自然主義的で、時に不協和音を奏でながらもミュージカル的に描かれてきました。ダンディーな映画作家セルジュ・ボゾンは演出への変わることのない信念に溢れ、勇敢に、映画の炎を燃やし続けています。

Olivier Père

1971年フランス生まれ。シネマテーク・フランセーズで、シネマテークの上映プログラムの企画に携わる一方で、「レ・ザンロキユプティール」誌などで映画批評を執筆。2004年から2009年まで、カンヌ国際映画祭監督週間のディレクター、2008年から2012年までロカルノ国際映画祭のディレクターを務める。同映画祭のディレクション中、富田克也の『サウダージ』、三宅唱の『Playback』などがコンペティションに選ばれ、2012年には青山真治に金豹賞(グランプリ)審査員特別賞が贈られた。2012年にアルテ・フランス・シネマのディレクターに就任、以後、ヨーロッパをはじめ、世界中の映画作家の作品を支援し、共同製作を続けている。またアルテのサイト (http://www.arte.tv/sites/olivierpere/) にて定期的に映画評も執筆し続けている。

また2019年は、常に活躍を続けてきた偉大な監督たちの製作にも密接に関わってきました。アルノー・デブレシャン (『ルーベ、嘆きの光』) (WOWOWにて3月放映)、そしてアンドレ・テシネ (『見えない太陽』)、彼らの作品は現代社会に非常に明晰な眼差しを向け、それ

2019年ベスト アルテ共同製作作品

arte

Best of 2019 Sélection d'Arte



アリスと市長 *Alice et le Maire* de Nicolas Pariser

(フランス/2019年/105分/カラー/デジタル)

監督：ニコラ・パリゼール 出演：ファブリス・ルキエニ、アナイス・ドゥームスティエ、ノラ・ハムザウほか
リヨンの市長ポール・テラノーは、「考え」が一切浮かばなくなり、若き哲学者アリスに助けを求めることに。『木と市長とメディアテーク』では高校教師を揚々と演じたルキエニが26年後、まさにロメルのコメディで、輝し銀の魅力で老いとともに人生を見つめ直す市長を演じる。そして、大きな瞳と潑刺とした魅力で、観客の心を捉える人気の若手女優、ドゥームスティエ演じる哲学者との真摯で、遊戯に満ち、心打たれる対話によってお互いが言葉の交わりによって「思考」を、そして「人生」を取り戻していく。第72回カンヌ国際映画祭監督週間出品。



君は愛にふさわしい *Tu mérites un amour* de Hafsia Herzi

(フランス/2019年/107分/カラー/デジタル)

監督：アフシア・エルジ 出演：アフシア・エルジ、ジェレミ・ラウルト、ジャンヌ・ブジアニほか
何よりも大切な恋人レミの裏切りを知り、リラは苦しむ。単身ポリビアに旅立ったレミから、二人の関係はまだ変わっていないと告げられるが、その言葉によってさらに苦しむリラは、友人たちとの会話、新たな出会いの中でもがき、愛の行方を求めて彷徨う…。奇る辺なく生きる現代を若者たちの恋愛をアダプティブ・ケシシュアアラン・ギロディらの作品に出演している女優、エルジが初監督、主演。第72回カンヌ国際映画祭批評家週間上映され、「宝石のように美しいラブストーリー」と絶賛された。タイトルはフリーダ・カーロの詩の言葉から。



リベルテ *Liberté* d'Albert Serra

[R16+]

(フランス=ポルトガル=スペイン=ドイツ/2019年/138分/カラー/デジタル)

監督：アルベルト・セラ 出演：ヘルムート・バーガー、マルク・スジーニ、イリアーナ・ザベート、リュイス・セラほか
ジャン・ピエール・レオ主演の『ルイ14世の死』が日本でも公開された鬼才アルベルト・セラが今度はフランス革命前夜の18世紀の退廃貴族たちの性、欲望のありか、サドの世界に迫る。ルイ16世のビュリタンの厳格な宮廷から追放された自由主義者達は、伝説的ドイツ人公爵フルジャンの支援を求めて国境を越える。2019年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門審査員特別賞受賞作品。「私にとって撮影とは上演（パフォーマンス）であり、一度限りのものだ。演じられている中で生まれるもの、感情を、それぞれが自律的な3台のカメラで撮影し、それらは再び生み出すことが不可能であり、とくにセックスが題材であればなおさらそうである」——アルベルト・セラ



シノニムズ *Synonymes* de Nadav Lapid

[R15+]

(フランス=イスラエル=ドイツ/2018年/123分/カラー/デジタル)

監督：ナダヴ・ラビド 出演：トム・メルシエール、カンタン・ドルメル、ルイズ・シュヴィヨットほか
『シノニムズ』は、パリの空っぽのアパートメントで凍えそうになった裸体と共に、象徴的な死とある誕生によって幕を開ける。物語は、祖国イスラエルからパリへと亡命し、文化、言語、国、すべてを白紙に戻し、未知の場所ゼロから生きることを選んだラビド監督自身の人生から着想を得ており、主役のヨアブは監督の分身であるだろう。本作はラビドがこれまで続けてきた試みのひとつの到達点でもある。それは通常なら詩的なものからほど遠いであろう憎しみや嫌悪の言葉や映像を結びつけ、それらの衝突の中から、そして視線の中から美を導き出すという試みである」——オリヴィエ・ペール
第69回ベルリン国際映画祭金熊賞受賞。



見えない太陽 *L'Adieu à la nuit* d'André Téchiné

(フランス=ドイツ/2019年/102分/カラー/デジタル)

監督：アンドレ・テシネ 出演：カトリーヌ・ドヌーヴ、ケイシー・モットー・クライン、ウーヤラ・アマムほか
2015年春、地方で牧場や農場を営むミュリエルは、久しぶりに帰ってきた孫息子アレックスとの再会に心躍らせる。しかしアレックスがイスラム教に入信し、しかもその教団がシリアのイスラム教テロリストたちとなつており、アレックス自身もシリアに向かうとしていたことを知ったミュリエルはなんとか彼を引きとめようとするのだが……。ドヌーヴがもっとも信頼を置くと言っている名匠アンドレ・テシネとの8本目の本作で、つねに目の前の対象に開かれ、その度に繊細な演技をみせてきた大女優の魅力が最大限に引き出されている。

DVD 発売中 KKDS-891 4,800円(税抜)/発売元:ビターズ・エンド、ミッドシップ/販売元:紀伊國屋書店



ディアスキン 鹿革の殺人鬼 *Le Daim* de Quentin Dupieux

(フランス/2019年/77分/カラー/デジタル)

監督：カンタン・デュビユー

出演：ジャン・デュジャルダン、アデル・エネルほか

鹿革ジャケットを手に入れたジョルジュは、異常なまでにそのジャケットに愛着を抱く。ひよんなことからビデオカメラも手にしたジョルジュは、ジャケットを羽織り、映画監督に扮して街へ繰り出し、「死のジャケット狩り」を開始する。フランスのエレクトロニックミュージシャン、DJとしても著名なデュビユーがジャン・デュジャルダンと初めて組んだスリラーで2019年カンヌ国際映画祭監督週間のオープニングで上映され人気を博した。注目の女優アデル・エネルが唯一、狂気に包まれた男に勇ましく対峙していく姿が強く、美しい。



カブールのツバメ

Les Hirondelles de Kaboul de Zabou Breitman et Éléa Gobbé-Mévellec

(フランス=ルクセンブルク=スイス/2019年/82分/カラー)

監督・脚本：ザブー・ブライトマン、監督：エレア・ゴベ・メヴェレック

声の出演：ジタ・アンロ、スワン・アルロー、シモン・アブカリアン、ヒアム・アッバスほか

1998年夏、アフガニスタンのカブールはタリバン勢力の支配下に。ズナイラとモーセンのカップルは、暴力と悲惨な現実の中でも希望を持ち続けていたが、ある行動が災いし…。大文字の歴史の中で翻弄される夫婦や恋人たちの日常のささやかなやり取り、感情が繊細に描かれ、心を打つ傑作アニメーション。スワン・アルローら、フランスで現在人気上昇中の俳優たちが声で出演している。2019年、カンヌ国際映画祭ある視点部門コンペティション出品。

セルジュ・ボゾン特集

Rétrospective Serge Bozon

1972年、フランスのエクス=アン=プロヴァンス生まれ。1988年に初長編作『友情』を発表。次作のミュージカルコメディ『モッズ』(2003年)でベルフォール国際映画祭にてレオ・シェア賞を受賞、その他30以上の国際映画祭にノミネートされる。第一次世界大戦を描いたシルヴィー・テステュー主演の『フランス』(2007年)でジャン・ヴィゴ賞を受賞。その後、イザベル・ユベール、サンドリン・キーベルラン、フランソワ・ダミアン出演によるコメディ『ティップ・トップ ふたりは最高』(2013年)を発表、カンヌ国際映画祭の監督週間に上映。さらにイザベル・ユベール主演の最新作『マダム・ハイド』では、第70回ロカルノ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門に選出、ユベールは本作で主演女優賞受賞。また監督以外にも映画批評家、俳優としても活躍している。



マダム・ハイド *Madame Hyde*

(フランス/2018年/96分/カラー/デジタル)

出演：イザベル・ユベール、ロマン・デュリス、ジョゼ・ガルシアほか

パリ郊外の高校に勤める内気な物理学の女性教師ジキルは生徒たちから見下されている。ある日、彼女は、実験中に失神し、神秘的で危険な力を感じるようになる。スティーヴンソンの代表作『ジキル博士とハイド氏』を19世紀後半のブルジョワ社会ではなくパリ郊外、現在を舞台に、男性ではなく女性を主人公に自由に脚色されたボソンの最新作。「トリュフォーが『野生の少年』で試みたように、学ぶということ映画でどう描くか、教育の重要性、難しさを見せたかった。そのため、冒頭では主人公はまだそこに至ってはいならず、ふつうの方法では変えられない状況にいる。そこにスティーヴンソンが介入してくるわけだ」——セルジュ・ボゾン



ティップ・トップ ふたりは最高 *Tip Top*

(フランス=ルクセンブルク/2014年/107分/カラー/デジタル)

出演：イザベル・ユベール、サンドリン・キーベルラン、フランソワ・ダミアン、キャロル・ロシェほか

フランス北部でアルジェリア系の情報屋が殺された。その情報屋は、地域のドラッグの密売に関わっていたが、警察署内部を探るため、ふたりの女性監察官、エスターとサリが派遣された。ひとりはずりこみをかけ、もうひとは覗き見る…そう、ふたりは最高のコンビ! 「ボソンはかつてゴダールが取った方法を応用してみせる。犯罪映画を口実にまったく別のものを語ること。では本作では何が語れているのか、おそらく傑出した前作のタイトルの中にその答はあるだろう、つまり『フランス』である」——オリヴィエ・ペール

Rétrospective Jean-Pierre Mocky

1933年ニース生まれ。長編だけでも67本の作品を監督し、フランス映画の中でもどこにも分類できない、ユニークな映画作家。フランス国立高等演劇学校に入学後すぐ、舞台、映画界の両方でその美貌と才能で一気に若手俳優として頭角を現す。1959年に監督として処女長編作『今晚おひま?』を発表し、商業的、批評的に成功を収める。「ヌーヴェルヴァーグの従弟」のような作品と評されるが、風刺的でメランコリック、そして類をみない反体制的な作風でほととは一線を画し、メインストリームから外れた場所で、自由に映画を撮り続ける。ラブコメディから風刺的コメディ、あるいは犯罪映画や軍隊もの、政治的作品から幻想的な作品まで、ひとつのジャンルにおさまることなく、慣例化された制度、価値には反旗を翻し、アナーキーな世界観や荒々しいまでのユーモアを一本ごとに刻印してきた。2019年8月8日逝去、享年86歳。

今晚おひま? *Les Dragueurs*

(フランス/1959年/78分/モノクロ/デジタル)

出演：ジャック・シャリエ、シャルル・アズナブール、ダニー・ロバン、アヌーク・エーメほか
土曜日の夕暮、フレディとジョゼフは、セーヌ河岸で偶然出会い、女の子を「ひっかけ」に街に繰り出す。20歳の装飾家でプレイボーイのフレディは「理想の女性」を探し求めている。かたやまじめな銀行員ジョゼフは妻を見つけ、家庭を持つことを望んでいる。アンバリッド、サン=ジェルマン=デ=プレ、ジャンゼリゼ通り、モンマルトル、彼らは、様々な女性たちと出会い、彼女たちの人生を垣間見ることに。29歳のジャン・ピエール・モッキーが自伝的な要素を交え、ささやかなテーマながら大胆な作風で、ほとんどロケで撮り上げた処女作。日本で公開された唯一のモッキー監督作品でもある。



言い知れぬ恐怖の町 *La Cité de l'indicible peur*

(フランス/1964年/92分/モノクロ/デジタル)

出演：ポール・ヴェルヴェ、フランシス・ブランシュ、ジャン・ポワレ、ヴェロニク・ノルデーほか
逃亡した偽札偽造者の捜索に乗り出したシモン・トリケ警部は、オーヴェルニュ地方の想像の村、バルジュにたどり着くのだが、そこには摩訶不思議な住民たち、出来事があふれていた……。ベルギーの幻想小説家ジャン・レーの原作を自由に、幸福感と繊細さとともにモッキーが映画化。モッキー作品にかかせない俳優のひとりポール・ヴェルヴェが風変わりな警部役を魅力いっぱい演じている。撮影はラング、オフュルス、ロッセンの作品も手がけた偉大なカメラマン、オイゲン・シュプタン。製作当時あまりにも「つひな」作品とされ再編集を強いられたこの傑作「詩的幻想映画」を、今回は監督自ら「ディレクターズ・カット」として蘇らせたバージョンで上映!



ソロ *Solo*

(フランス/1970年/87分/カラー/デジタル)

出演：ジャン・ピエール・モッキー、アンヌ・ドゥルーズ、デニス・ル・ギヨほか
魅惑のヴァイオリン奏者のヴァンサン・キャブラルは宝石泥棒でもある。彼の弟のヴィルジルはアナキストのグループに属していて、殺人にも手を染めていた。ヴァンサンはこれ以上の殺戮が繰り返されないように、警察より先回りしてヴィルジルを追いかけられるのだが……。 「70年代、モッキーはB級犯罪映画を自ら主演し、連続して撮っている。アクションに次ぐアクション、そして演出のアイデア満載の本作は68年五月革命直後についてのモッキー自身の考察から出発している。シニクなアンチヒーローを演じるモッキー、ジョルジュ・ムスタキのテーマ曲によって怒りを帯びたロマンチズムに包まれたフィルムノワール」——オリヴィエ・ペール



赤いトキ *L'ibis rouge*

(フランス/1975年/80分/カラー/デジタル)

出演：ミシェル・セロー、ミシェル・シモン、エヴリーヌ・バイルほか
孤独な会社員ジェレミーは赤いマフラーで次から次に女性たちを絞め殺してきた。同じ界隈に住み、賭博好きレーモンは、借金を返済するために愛する妻のエヴリーヌに宝石を売るよう頼む。そんなふたりが出会い、ある計画が立てられることに……。 「フレドリック・ブラウンの推理小説『3、1、2とノックせよ』から着想を得た本作は、ファンタスティックかつポエティックにフランス社会を描いたモッキーの代表作のひとつ。本作が選作となった偉大な俳優ミシェル・シモンへのオマージュでもあり、サン=マルタン運河沿いで多く撮られていることもあり、とりわけ「素晴らしい放浪者」や『アタラント号』の記憶が蘇ってくる」——オリヴィエ・ペール



*すべて、デジタルリマスター版にて上映。

ジャン・ピエール・モッキー特集